
帰り道

在形 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰り道

【Zコード】

N7915M

【作者名】

在形直

【あらすじ】

職場で鬱々とした気持ちが帰り道に切り替わる瞬間。それはちょっとした事。そういう事って大事だつたりするんですね。

(前書き)

昔書いたものです。文章としては雑な部分もあるんだけど、気に入っている。

「おい佐藤！違うだろ、ちゃんと見ろよ」

「はい」私は下をつつむいたまま答える

「聞いてんのか、もつとしやきつとしろよ、心配だよ、ほんとにこな
あ」

苛苛した上司の声が響く、ああ間違えたよ、わかつてゐるよ、そういうだ
よ、くそつ

上司の中井は部下の失敗を見つけるとまるで、物凄い発見をしたか
のような表情をする

しかる事を無上も喜びに感じる人がいるが、彼はその一員だ。

「はい、すみません…」

何度も、すみませんと言えばいいのだろうか。

それから10分後、やつと机にもどる、説明やら訳のわからん謝罪
(何に対しても途中からさっぱりわからないかった)、最後はなん
だか同情されて(なら早く解放してくれよ!)、んで30分たつて
いた。

これでまた仕事が遅れる…くそったれ!

「佐藤君、昼行かないの?」

児玉さんの声。

「いやあ、ちょっとね時間かかりそうだよ」笑いながら答えた。

「じゃあ、また今度ねー」笑いながら同僚たちと去っていく姿、
ふうとため息

結局、20分オーバーか…中井の小言が長くなればな…しゃあな

い。まあ一人つてのも気軽でいい。

菓子パンと缶コーヒーを飲みながら、空を見る。

天気がいい 快晴！ 本当は天気なんてどうでもいいけど、もうこうなりや「よかつた探し」だ！

おおーい、いい天氣だあ 私は心の中で控えめに叫んだ。

結局、ちょっとのズレがふくらんでいた。

画面がうつろな顔して早く電源を落としてくれと言っている。

まあ待て 僕だつて早く帰りたいぜ。

ふだんは困った事があると、助けてくれる？と調子のよい中部が声をかけて来た。

「わるいなあ ジヤつお先！」

悪いと思つてないくせに…挨拶はいいから、帰れよーついでに中井部長も持つてつてくれよって、あら部長いくの？

はあ 仲の良い事で。私は心中で10回は悪態をつき、ネタが無くなつた事でやつと落ちついて仕事に入った。

一人、職場の明かりを消す。

あー仕事した、こういう事が大切だつたりする、なにかしらの充実感。

部長の小言も中部のアホ面も全て許してやる。さあて、誰も居ないのをちょっと確かめる。

「許してやる」声に出して言つてみた。

大声だしたいなあ、でもいいか、馬鹿みたいだし（もう充分馬鹿な

のは承知さ)。

でも声出した事で、ちょっととした開放感、こういう事も大切なのさ。

いつも寄つていぐ居酒屋を田にしたが 酒を飲むよりさつぱりしたくて、今日は寄り道はしない。

シャワーを浴び男臭い部屋でビール。その事を楽しみに、電車に乗り、電車を降り、駅をでる。

汚いボロアパートまで徒步18分、借りた時は徒步15分つていう触れ込みだが、現実はそんなもんだ。

夜の帰り道は嫌いじゃない、なんか汚いポスターとか、道に落ちているゴミとか目立たなくて、まあマシってだけ。

それに別に急ぐ必要もないし。それがなんだか贅沢な気分、自分だけの時間。

都会は夜も人通りが多い、でも他人が何かのオブジェのように感じて、寂しくなくて、悪くないと思つ。

なんか無理やり盛り上げたくて、ちょっとと心の中で鼻歌を歌つ。別に鼻歌じゃ無くてもいいけどね、心の中だから。

でもやつぱり歌には自信がないから、鼻歌な感じが丁度いい。

「さつぱりして…ビール！」鼻歌の合間に時々唱える、もちろん心中で（あたりまえだ）。

そんでもつてまた鼻歌。なんだか楽しくなつて、きたか？。

この通りを過ぎて角を曲げれば、もうすぐボロアパートが見える。

私の部屋の下の住人は若い青年（学生だらう）が住んでいて、いつも明かりがついている。

何故かしらないけど、カーテンを開けていて、彼の痩せた体がひょこひょこと動く。

俺の下に人が動いて、生活しているんだよなあと帰り道いつも思つ。

誰か知らないけど、それは一人暮らしの私をちょっと安心させる。

私は空をみた　月あかりに紫の雲が動いていた。

もうすぐボロアパートが見える。

急に、両手を上げて少し背伸びしたくなつた。

立ち止まって両手を上げて、背筋をのばして、声をあげる。

「うーん……んあ？」

視界に入ったそれを、間抜けな声で受け止めてしまった。

薄ピンクで、黒い夜空に輝いて、そんでもって、そんでもって……
そう言えばもう4月かあ。

目の前の桜は満開で……綺麗だつた。

何で気づかなかつたんだろう？

いつもずっとこいつらと並んで歩いたのになあ。

私は風を感じながら確かめるようにそれを見た、桜はやっぱり綺麗
だった。

私はなにかわからないけど、なにかを見つけた子供のような気分になつた。

ふふ、夜桜！

月の光が照らす桜が空の黒に散りばめている。

汚い街の美しい時。

風が気持ちよかつた。

最近とても時間たつのがはやかつたり、なんか寂しかつたりするけ
ど、でもそれ程悪くはない……そう思った。心が静かに弾んだ。

アパートが見えた、やっぱり私の部屋の下は明かりがついている。

青年がひょこひょこと動いている。

やっぱ、変な動きだよなあ、私は笑う。

「ちいぱつして、ビールだ！」私は声に出して歩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7915m/>

帰り道

2010年10月11日02時38分発行